

イデックスオイルレポート ~For a week~

株式会社新出光

【概況】

●30日、月間では4.43%高。週間では1.20%安となった。米メディアは30日、関係者の話として、OPECプラスの有志8カ国が31日に予定されているオンライン会合で、増産決定が見込まれている7月の原油生産量について、市場が見込んでいた規模(日量41万1000バレル増)を上回る増産が検討される可能性があるとして報じた。これを受けて、需給緩和懸念が強まり、原油が売られ相場は**60.79**ドルへ続落した。

●2日、石油輸出国機構(OPEC)加盟国とロシアなど非加盟産油国で構成する「OPECプラス」は5月31日、オンラインで会合を開き、7月に日量41万1000バレルを増産することで合意した。大幅増産は3カ月連続となった。一方、前週の一部報道を受けて警戒されていた日量41万1000バレルを超える増産は回避されたため、供給過剰への警戒感が幾分後退し、投資家心理が改善。買い安心感から、相場は**62.52**ドルへ反発した。

●3日、ウクライナのゼレンスキー大統領は週末、同国保安局(SBU)主導で、ロシア各地の空軍基地にドローン攻撃を行ったと認めた。SBUは3日には、ロシアが併合したクリミア半島とロシアを結ぶクリミア橋の基礎部分を爆破したと明らかにするなど、両国の戦闘に沈静化の兆しは見られない。2日に行われた今年に入り2回目となる両国の直接協議でも、長期化した侵攻の停戦に関して具体的な進展はなかった。ロイター通信によると、ロシア側が戦争終結に向けウクライナと合意に至る作業は極めて複雑で、拙速に決定すべきではないとの見解を示した。地政学的リスクへの警戒感から原油の買いが先行し、相場は**63.41**ドルへ続伸した。

●4日、米エネルギー情報局(EIA)が発表した5月30日までの石油在庫統計では、ガソリン在庫が前週比520万バレル増と、予想(60万バレル増=ロイター通信拡大版調査)を大幅に上回る積み増し幅となった。ディスティレート(留出油)も420万バレル増(同100万バレル増)だった。夏場のドライブシーズン入り直後にガソリン在庫が大幅増となったことでエネルギー需要の見通しに警戒感が強まり、原油は売りにさらされ相場は**62.85**ドルへ反落した。原油在庫は前週比430万バレル減と、予想(同100万バレル減)を上回る取り崩し幅であった。

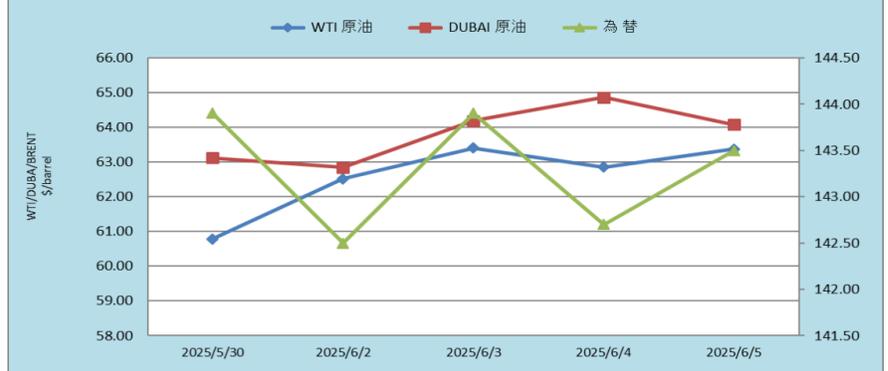
●5日、中国の習近平国家主席とトランプ米大統領は5日、電話会談し、閣僚級の会合を近く開くことで一致した。会談は第2次トランプ政権発足後初めて。両首脳は1時間半にわたる電話会談で停滞している貿易問題について議論した。トランプ氏は会談後、「非常に前向きな結論に至った」とSNSに投稿。両国が対立を深めるレアアース(希土類)の輸出規制に関して「問題は解消される」との見方を示した。市場では、米中の通商交渉が進展するとの観測が浮上し、貿易摩擦激化へのリスク警戒感がやや後退。エネルギー消費大国である米中の需要が拡大するとの期待を追い風に、相場は**63.37**ドルへ反発した。

6月6日 16:00現在 WTI原油 63.22ドル 為替 1ドル 144.76円

国内石油製品在庫 5月31日時点 単位:万KL



ドル/bbl WTI・DUBAI / 為替 相関グラフ 単位:円



	次回元売変動予測	
	6/12~	元売変動予測
ガソリン	→	-0.6~-1.1
灯油	→	±0.0~-0.5
軽油	→	-0.6~-1.1
A重油	→	±0.0~-0.5
LSA	→	±0.0~-0.5

※原油コスト「0.0円~-0.5円」
 ※激変緩和補助金(ガソリン・軽油)「10.0円」前週比-0.6円
 ※現時点での予測です。

【製品卸価格】

《今週》今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストは「-0.5円」、補助金は、「ガソリン・灯油@9.4円・軽油・A重油@5.0円」、都合「ガソリン・軽油 ▲1.5円・軽油 A重油▲0.5」の改定となった。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの2日時点の小売価格平均は174.3円となっている。

《6月12日以降》次回の元売り改定は、原油コストは「0.0円~-0.5円」、激変緩和補助金は「10.0円」の見込みで、都合「ガソリン・軽油:-0.6円~-1.1円、灯油・A重油:0.0円~-0.5円」の改定予測となっている。

【次世代エネルギー】 <地下を水素の「工場」に、国が研究支援へ 国産エネルギー資源になるか>

地下で水を岩石と反応させ、水素を人工的に製造する方法が注目されている。地層中で化学反応を利用し水素を効率的に回収することで、日本の国産エネルギー資源になると期待されている。

NEDOは2025年度に産業技術総合研究所などを支援しこの技術開発を進める。水素の発生は地中のかんらん岩を用い、水を加え鉄と反応させることで蛇紋岩に変化、同時に水素が発生する。地下から発生した水素は回収し発電に活用される見込みである。日本にもこの反応を起こせる岩石が多く存在するが、自然発生の「天然水素」の活用も検討されている。研究者たちは水素発生の効率や地震発生リスクなどの課題を検証している。特にかんらん岩と水の反応はセ氏300度で最も効率的とされ、さらに低温条件での技術開発も進行中である。

また、地層の成分や比率、温度などの条件を検証しつつ、経済性と効率性向上のために技術革新が重要視されている。地下から水素を効率的に回収する技術が求められ、採掘コストの削減が期待されている。NEDOはこの分野を「フロンティア領域」として支援し、40年頃の実用化を目指している。地下水素の研究は始まったばかりで課題も多いが、日本の国産エネルギー資源としての可能性を秘めている。